

## 犯罪をした人の立ち直りへの協力意向をめぐる実証研究

## ブール代数アプローチを用いた試論的検討

○ 摂南大学 竹中祐二 (008864)

キーワード：再犯防止・ボランティア・ブール代数アプローチ

## 1. 研究目的

2016年に制定された「再犯防止推進法」は、地方公共団体の責務を定めたほか、民間協力者の積極的な活用を目指している点で、従来の刑事政策とは大きく異なるものと評価されている。更生保護制度では伝統的に民間ボランティアの活躍が期待されてきたが、例えば保護司のなり手が少ないことが指摘されているように、社会全体で見たときには一部の人の善意によってのみ更生保護が担われているという活動の限界も指摘されている。ところで、再犯防止推進法では20条で、「効果的な処遇の在り方等に関する調査及び研究を推進する」必要があると規定されている。これらの問題意識から、「犯罪をした人の立ち直り」（以下、「再犯防止」）を支える基盤について議論するための知見を提供するための実証的検討を行うことを、本研究の目的として定める。

## 2. 研究の視点および方法

本研究では、2022年8月に実施したオンライン調査票調査によって得られたデータに対して、ブール代数アプローチを用いた試論的検討を行う。石田淳によれば、このアプローチは、「ある結果（従属変数）を生起させる条件（独立変数）の組み合わせを論理式（ブール代数式）の形で表し、定型化されたアルゴリズムを用いてその論理式を単純化する方法」として説明される（石田 2007：3）。本研究では、内閣府が実施した「再犯防止対策に関する世論調査」にならって、犯罪をした人の立ち直りに協力したいかどうかの択一選択設問に対して4件法で尋ねたのち、「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」と回答した者に対してのみ、協力したいと思う6つの項目に対して多肢選択式で尋ねている。そして、後者の設問群について、回答を「当てはまる=1/あてはまらない=0」とする二値変数とし、設問単位での「あてはまる」と回答した集合間の関係から、回答パターンについて検討する。

## 3. 倫理的配慮

本研究で用いるデータは、オンラインモニターを対象とした調査によって収集されている。この調査は、報告者が調査実施当時所属していた機関である北陸学院大学において、北陸学院大学及び北陸学院短期大学部研究倫理審査委員会での審議に基づく承認を受けて実施されたものである（受付番号：2021-15）。調査対象者からは、画面上での提示によって、データの使用にあたっては個人の特が不可能な形に加工することにより、当該個人

への不利益が発生するのを回避するといった説明を行い。調査同意を得ている。実際に、データの加工・集計・分析においては、調査対象者が特定されないように匿名性に配慮している。なお、本報告に関連して、開示すべき利益相反（COI）はない。

#### 4. 研究結果

小澤（2001）によれば、ボランティアへの関心の程度と、実際のボランティア活動ならびにその他の援助行動との間に正の相関関係が認められている。そのことから、スクリーニング質問によって再犯防止の協力意向を二段階に分類し、相対的な協力意向によって、協力意向を示す取り組みの数や、回答パターンに違いが生じると考える。分析の結果、全体的には理論的に想定されるよりも小さな値によっていたものの、協力意向が高い回答者の方が、より多くの取り組みに協力意向を示すという傾向が確認された。また、ブール代数アプローチによって回答傾向を分析した結果、協力意向が相対的に高い回答者の中では、多くの取り組みに対する協力意向を示す割合が大きいと共に、特定の取り組みに回答が集中する一方、協力意向が相対的に低い回答者の中では、どれか1つの取り組みについてのみ選択する傾向があり、その中でも回答者による傾向の違いが見られる取り組みとそうではないものに分かれることが確認された。

#### 5. 考察

本研究では、仮説の通りに、全体的な再犯防止に対する協力意向と、個別の取り組みに対する協力意向の程度や回答パターンに違いが生じることが明らかになった。ところで、本研究では、当てはまる／あてはまらないと回答する確率をそれぞれ2分の1とする二項分布を理論的前提に置き、ブール代数アプローチによる分析を行っている。それにより、回答パターンの違いが確認されたのであるが、逆に言えば、だからこそ、取り組みによって、協力意向を示すかどうかの確率が異なると考えられる。このような質的な差異をいかに考慮するのが、本研究の限界であり、また今後の課題である。また、本研究ではボランティア一般に対する先行研究に即して仮説を立てたが、再犯防止の取り組みへの協力は、他の社会課題よりもハードルが高いことは容易に想定される。そのため、犯罪／再犯防止に関わる固有の論点を考慮した上で、協力意向についてより精緻な分析を行う必要があることも、合わせて今後の課題としたい。

#### 参考文献

石田淳（2007）「ブール代数分析による社会的カテゴリーの研究——『日本人』カテゴリー認識の分析」『ソシオロジ』52(1), 3-19.

小澤亘（2001）『ボランティアの文化社会学』世界思想社。

謝辞：本研究はJSPS 科研費 JP19H01558、JP20K02170、JP23H00872 の助成を受けたものです。